

四旬節第4週 日曜日 3月22日 自分の人生を振り返ると

第一朗読 (歴代誌下 36章 14—16・19—23節)

14 祭司長たちのすべても民と共に諸国の民のあらゆる忌むべき行いに倣つて罪に罪を重ね、主が聖別されたエルサレムの神殿を汚した。15 先祖の神、主は御自分の民と御住まいを憐れみ、繰り返し御使いを彼らに遣わされたが、16 彼らは神の御使いを嘲笑い、その言葉を蔑み、預言者を愚弄した。それゆえ、ついにその民に向かつて主の怒りが燃え上がり、もはや手の施しようがなくなつた。

19 神殿には火が放たれ、エルサレムの城壁は崩され、宮殿はすべて灰燼に帰し、貴重な品々はどこごとく破壊された。20 剣を免れて生き残つた者は捕らえられ、バビロンに連れ去られた。彼らはペルシアの王国に覇権が移るまで、バビロンの王とその王子たちの僕となつた。21 こうして主がエレミヤの口を通して告げられた言葉が実現し、この地はついに安息を取り戻した。その荒廢の全期間を通じて地は安息を得、七十年の年月が満ちた。

22 ペルシアの王キユロスの第一年のことである。主はかつてエレミヤの口を通して約束されたことを成就するため、ペルシアの王キユロスの心を動かされた。キユロスは文書にも記して、国中に次のような布告を行き渡らせた。

23 「ペルシアの王キユロスはこう言う。天にいます神、主は、地上のすべての国をわたしに賜つた。この主がユダのエルサレムに御自分の神殿を建てることをわたしに命じられた。あなたたちの中で主の民に属する者はだれでも、上つて行くがよい。神なる主がその者と共にいてくださるようにな。」

第二朗読 (エフェソ2章 4—10節)

4 しかし、憐れみ豊かな神は、わたしたちをこの上なく愛して下さり、その愛によつて、5 罪のために死んでいたわたしたちをキリストと共に生かし、――

あなたがたの救われたのは恵みによるのです――6 キリスト・イエスによつて共に復活させ、共に天の王座に着かせてくださいました。7 こうして、神は、キリスト・イエスにおいてわたしたちにお示しになつた慈しみにより、その限りなく豊かな恵みを、来るべき世に現そうとされたのです。8 事実、あなたがたは恵みにより、信仰によつて救われました。このことは、自らの力によるのではなく、神の賜物です。9 行いによるものではありません。それは、だれも誇ることがないためなのです。10 なぜなら、わたしたちは神に造られたものであり、しかも、神が前もって準備してくださつた善い業のために、キリスト・イエスにおいて造られたからです。わたしたちは、その善い業を行つて歩むのです。

福音 (ヨハネ3章 14—21節)

14 そして、モーセが荒れ野で蛇を上げたように、人の子も上げられねばならない。15 それは、信じる者が皆、人の子によつて永遠の命を得るためである。16 神は、その独り子をお与えになつたほどに、世を愛された。独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである。17 神が御子を世に遣わされたのは、世を裁くためではなく、御子によつて世が救われるためである。18 御子を信じる者は裁かれぬ。信じない者は既に裁かれている。神の独り子の名を信じていないからである。19 光が世に來たのに、人々はその行いが悪いので、光よりも闇の方を好んだ。それが、もう裁きになっている。20 悪を行う者は皆、光を憎み、その行いが明るみに出されるのを恐れて、光の方には來ないからである。21 しかし、真理を行う者は光の方には來る。その行いが神に導かれてなされたといふことが、明らかになるために。」

朗読から祈りへ

— 洗礼への過程 —

四旬節も終わりに近づき、今年の復活祭に受洗を望んでいる方も洗礼志願者として最後の準備に入っている。洗礼への道は人それぞれで、その道を志願者と共に歩めることは教会にとって大きな喜びである。

洗礼の準備は通常、求道者のクラスを年度初め（復活祭後）に編成し、信仰箇条の説明が主にその内容となっている。教義と倫理の説明である。たいていの場合、週一度のクラスに十分に出席していないと、洗礼を受けることはできない。また、中途からの出席は好ましくない。この場合、受洗は翌年以降に持ち越されるのが通常ではないだろうか。

しかし、このような画一的な準備クラスでは、受洗希望者の望みをかなえることは容易ではない。一人ひとりの人生の歩みは違っているし、洗礼を受ける動機も、心の状態も異なっている。親が信者だったから。妻が、夫が信者だったから。ミッシェンスクールや幼稚園の関係で。友人から誘われて。いつも教会の

前を通っていて、いつか入ろうと思っていて、入ったら「出会い」があつて。病気になる。本を読んで。映画を見て。ただ何となくとか、いつの間にか、といったこともある。とにかく、何らかのきっかけで洗礼の準備は始まる。

神は一人ひとりにとって一番ふさわしい時に、ふさわしい方法で語りかける。そうしてご自分のもとに引き寄せるさまは「神の芸術」ともいえる見事なものである。

洗礼の準備期間が問題にされるようである。どのくらい準備して受洗したのが気になるふしがある。ある人が洗礼を受けたとき、その準備期間は、その人のそれまでのすべての時間ではなからうか。人はすでに神の子として生まれている。すべて、みんな。ある時、ある出来事により、それに気づいてイエス・キリストが示してくださった道を歩む決意をするのが受洗の時ではないかと思う。いろいろな準備、いろいろな時がある。

— 振り返ってみると —

「神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである。神が御子を世に遣わされたのは、世を裁くためでは

なく、御子によつて世が救われるためである。」神がイエスを遣わされた目的ははっきりしている。ひとたび命を与えた神は、その命が滅んで無に帰することを望まない。無から有に生まれた者は永遠の命を得る。神は世を裁くためにイエスを遣わされたのではない。救うために遣わされた。

人は教義を学んだから洗礼を受けるのだろうか。教義を理解するから神の救いを信じるようになるのだろうか。自分の人生を振り返った時、その時の流れの中で神の働きに気づくことができるのではないだろうか。

歴代誌で語られているように、捕囚時代を振り返ることによつて民はその罪に気づき、そのことによつて安息を得る。エフエソの教会への手紙に記されているように、自分の人生を振り返ることによつて、そこに働いておられる憐れみ豊かな神の愛に気づくのではないか。罪のために死んでいたわたしたちを生かしてくださる神に気づくのではないか。

無に帰することの恐怖からではなく、裁かれることへの恐れからではなく、神の恵みに気づいた時に救いへの道が始まる。信仰は気づきであり、それは恵みによつてもたらされる。

(M・M・Y)